

2014年度 大学院奨励研究員研究報告書

研究科委員長印



2015年 3月 27日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	箕浦 有希久	印
-----	--------	---

指導教員

所属・職名	文学部教授	
氏 名	成田 健一	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	2項目自尊感情尺度の開発と妥当性検証：特性と状態の2面からのアプローチ
採用期間	2014年 4月 1日 ～ 2015年 3月 31日

研究科受付印	教務機構受付印

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
	担当箇所：					

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	(ポスター発表) 日本感情心理学会第22回大会	開催地	栃木県宇都宮市 宇都宮大学 峰キャンパス
題目	日記法による全般的・領域特定の自尊感情の変動性とレベル—日常の感情状態との関連性に注目して—	発表年月日	2014年6月1日

学会名	(ポスター発表) 日本心理学会第78回大会	開催地	京都府京都市 同志社大学 今出川キャンパス
題目	2項目自尊感情尺度の妥当性の検討—評価的側面・受容的側面それぞれに注目して—	発表年月日	2014年9月12日

学会名	(口頭発表) 関西心理学会第126回大会	開催地	大阪府大阪市 大阪市立大学 杉本キャンパス
題目	日記法による全般的・領域特定の自尊感情の変動性とレベル—Web調査データによる検討—	発表年月日	2014年11月9日

研究経過状況（3000字程度）

研究の目的

本研究の目的は、きわめて少ない項目数からなる自尊感情測定のための心理尺度を新たに開発し、その信頼性・妥当性を確認することである。項目数の少ない尺度を開発することで、調査に要する時間や労力を最小限に抑えることが期待できる。自尊感情は心理学のみならず教育・社会・文化など幅広い領域で注目されているため、本研究によってそれを簡便かつ正確に測定できる方法を提供することができれば非常に有用である。

自尊感情 (self-esteem) とは、自分自身に対する全体的評価感情の肯定性、すなわち自分自身を基本的に良い人間、価値ある存在だと感じることを意味する。一般的に“自信”や“自己肯定”と呼ばれる内容と類似したものである。心理学の研究において想定されている自尊感情の定義には、傲慢さやうぬぼれといったネガティブな特徴は含まれていない。

心理学・社会科学領域の数多くの研究において、自尊感情と人のさまざまな望ましい特徴との関連が確認されている。たとえば自尊感情が高い人は、幸福感が高く、抑うつや不安といったネガティブ感情が低い。このように自尊感情は、日常生活における個人の幅広い充実度や精神的な健康を反映した指標の一つとみなせる。

これまでわが国で用いられることの多かった自尊感情の測定尺度は、10項目から60項目でいどの項目数からなるものである。自尊感情に限らず、既存の心理尺度の多くがこのように多数の項目から構成されている。その理由は、複雑で多様な内容を含んだ心理的構成概念の全体像を測るために、それに対応した多様な表現の複数項目を利用しているからである。

近年、わずか1～2項目から構成されたきわめて項目数の少ない心理尺度が開発され、その信頼性・妥当性が検討されている。自尊感情についても1項目尺度が開発されているが、その項目は “I have high self-esteem. (私は自尊感情が高い)” という非常に直接的な表現である。したがって、自尊感情を測定するためにこの1項目尺度を日本語に翻訳して用いることは適切ではないと考えた。

そこで新たに項目数の少ない自尊感情の測定尺度を開発し、2項目自尊感情尺度と命名した。尺度項目は“自分にはいろいろな良い素質があると思う”、“自分のことを好ましく感じる”の全2項目である。回答評定は、非常にあてはまる(5点)・ややあてはまる(4点)・どちらともいえない(3点)・あまりあてはまらない(2点)・全くあてはまらない(1点)、の5件法であり、全2項目への回答を単純加算した得点を自尊感情の高さの指標とみなす。項目考案のプロセスについては、査読無紀要論文(箕浦有希久・成田健一 2項目自尊感情尺度の提案—評価と受容の2側面に注目して— 人文論究 関西学院大学人文学会 63巻1号 pp.129-147 2013年5月)に報告している。

奨励研究員採用以前の研究経過

大学生を対象とした質問紙調査によって2項目自尊感情尺度と既存の自尊感情尺度やその他の変数の相関分析・主成分分析から、尺度の併存的妥当性と構成概念妥当性を確認した。また異なる2つのサンプル(3週間間隔と約4ヶ月間隔)双方において、相関分析から十分な再検査信頼性が確認された。ここまでの研究成果は、査読有学会誌論文(箕浦有希久・成田健一 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究 日本感情心理学会 21巻1号 pp.37-45 2013年10月)に報告した。

その後、特に精神的健康・抑うつ症状と自尊感情の関連に注目し、大学生を対象とした質問紙調査(上述の研究とは異なるサンプル)によって、相関分析から2項目自尊感情尺度の構成概念妥当性を再び確認した。この研究成果は海外学会ポスター発表で報告した。これらの結果より、2項目自尊感情尺度はきわめて少ない項目数でありながら、十分な信頼性・妥当性を備えており、自尊感情の測定尺度として有用であることが示唆された。

2014年度奨励研究員採用中の研究経過

本研究によって新たに作成した2項目自尊感情尺度のメリットは、測定に要する時間や労力を最小限に抑えることができる点と、自尊感情概念を評価と受容の2側面から測定することができるという点である。そのメリットを生かすことができる研究場面として、(1)日記式調査による研究と、(2)評価と受容の2側面に注目する研究が想定される。そこで2014年度中は2項目自尊感情尺度を用いて、(1)および(2)に関して検討するための研究を実施した。

まず(1)の日記式調査による研究とは、同一人物に対して一定期間毎晩同じ内容の質問調査をくりかえし実施する方法である。この手続きは調査全体を通して対象者に求める労力や負担が過度に大きくなりやすい。負担の大きい調査は、途中脱落者が増加してしまいう可能性が問題となる。2項目自尊感情尺度を用いることによって、最小限の負担で日記式調査において自尊感情を測定可能であることが確認できれば、多くの研究者にとって利用価値の高い尺度であることが主張できる。また性別、年齢、職業などの多様な特徴をもつ人々を対象として測定の妥当性を確認することができたならば、尺度の利用可能性の幅広さを主張することができる。

そこで一般成人を対象にインターネット調査会社を利用したWeb調査、および大学生を対象とした質問紙調査の双方で7日間の日記式調査を実施した。部分的にでも参加した対象者は延べ9223名にのぼる大規模調査となり、データの分析結果から2項目尺度による測定の妥当性が十分高いことが確認された。これらの成果の一部は2014年度中にポスターおよび口頭での学会発表(2頁参照)によって報告した。また(2)の点について検討するために、この調査では2項目自尊感情尺度と同時に、自尊感情概念を評価と受容の2側面から測定する既存の20項目尺度を使用した。その結果、2項目自尊感情尺度の各項目が、評価と受容の2側面それぞれを測定している点について妥当性を確認した。この成果は2014年度中にポスターでの学会発表(2頁参照)によって報告した。

2015年3月7日(土)には、関西学院大学上ヶ原キャンパスF号館102教室にて、2014年度奨励研究員として研究経過報告の公開発表をおこなった(発表題目「2項目自尊感情尺度の妥当化:少数項目測定の可能性を探る」)。関西学院大学文学研究科総合心理科学専攻に関連する教員、研究員、大学院生、および学外の研究者が集まり、規定時間を過ぎてもお熱い議論が交わされた。

本研究への注目は国内のみならず、海外の研究者からも興味を集めている。San Martin de Porres University(ペルー)のDr. Cesar Merinoを中心とする心理・教育測定学の研究グループは、日本で開発された2項目自尊感情尺度のスペイン語翻訳版の作成に挑戦している。現在、彼らはペルー・アルゼンチン・エクアドルの南米三カ国における青年期を対象とした調査研究での2項目自尊感情尺度の利用を目指して、予備調査の実施にとりかかっている。

今後の見通し

現在、2014年度奨励研究員採用期間中に実査を行って得られた日記式調査データについてさらなる分析を進めると同時に、論文3編について投稿準備を推進している。非常に大規模かつ複雑な構造のデータを得ることができる望外の機会に恵まれたため、当初の予定よりも学会誌論文公刊や博士学位申請論文の提出が遅れていることは遺憾きわまらない点である。しかし今後は、奨励研究員に採用されたことで得られた多くのリソースを最大限に活かして、2015年度中の博士学位取得に向けて尽力する予定である。

以上